The Osaka University Library Bulletin ISSN 0387－4400

大阪大学図書館報

Vol. 24 No. 1 May 1990(平成２年)通巻100号 記念号

目　次

○通算100号を祝して
○「大阪大学図書館報」100号記念号に寄せて
○大阪大学図書館の想出など
○カードからオンラインへ
　ーオンライン総合目録の現状についてー
○教官著作寄贈図書
○会　議
○お知らせ
○日　程
○人　事

通巻100号を祝して

総長　熊　谷　信　昭

昭和42年（1967年）９月に大阪大学図書館報の第１巻第１号が創刊されてから、本号で通巻100号を数えることになりました。まことに素晴らしいことであります。

生みの苦しみと育ての苦労をしてこられた歴代図書館長をはじめ、分館長、図書館委員会委員の皆様、特に、編集をはじめとする実務を担当してこられた事務職員の方々の一方ならぬご苦労とご努力に対し、この機会に改めて敬意と謝意を表したいと思います。

この館報の創刊号で、当時の附属図書館長であった宮地徹教授は、「この館報が無味乾燥なものにならず、低きにつかず、大学の象徴としての大阪大学図書館の理想をかかげて、それを求める旗印になることを願ってやまない。」と創刊のことばを述べておられます。

創刊以来今日までの館報をいま改めて通読してみますと、「利用者と図書館を結ぶよきパイプ」としての広報の役割を見事に果してこられたことはもちろんのこと、毎号興味深い随想や格調高い論説等が掲載されていて、まさに宮地図書館長が創刊にあたって期待された通りの成果をあげてこられていることがわかります。

そればかりではなく、この館報は本学における図書館活動とその発展の歴史を、その時々の学内情況や時代背景とともに生々しく後世に伝える貴重な資料ともなっています。例えば、創刊号では、図書館の概況として蔵書数732,741点（昭和42年５月１日現在）と記されており、また吹田図書館着工の一年延期とそれにともなう諸問題等が報じられています。現在の蔵書数が230万点に近いことや、吹田地区における図書館としては吹田分館につぐ二つめの本格的な図書館として新しく生命科学図書館の建設が始まっていることなどを思いくらべて

みますと、まことに感慨深いものがあります。

このように、本学の図書館は、ご関係の皆様の非常なご努力によって、順調に充実・発展の歩を進めてまいりましたが、しかし一方、色々な問題がないわけではありません。中でも最も基本的な問題の一つは、情報化の進展にともなう図書館および図書館活動の在り方に関する問題です。

ご承知のように、近年の情報・通信技術の革新的な進歩は、図書館および図書館活動の在り方にも大きな影響を与えつつあります。情報の記録・蓄積や、その検索などに関する技術が画期的な進歩をとげ、また全世界的な高度情報ネットワークの構築が急速に進みつつある現状からすれば、そのような情報化社会の中における図書館の在り方も、時代の流れに適応した新しい目で見直す必要が出てくるのはむしろ当然のなりゆきであるといえましょう。そういう意味で、図書館はいま、大きな変革期を迎えようとしているということができると思います。

情報化社会については、色々な人が、色々な側面から、色々な論評をしています。例えば、情報化社会のもつ特質の一つとして、情報化社会はペーパーレス社会になるという指摘があります。オフィスなどでも、夫々のデスクの前にパソコンが置かれ、情報はすべてパソコンに記憶され、パソコンのパネル上に必要な情報が必要な時にうつしだされるようになって、紙（ペーパー）の資料類はなくなっていくであろう、というわけです。

そしてまた、情報化が進展すればする程、本を読む人が減り、紙に書かれた書物や書籍は減っていくのではないかと心配する人が沢山います。「パソコンよこんにちは、グーテンベルクよさようなら」というようなことが言われて、読書人が減少し、従って出版業や書店業などは非常に厳しい苦難の時代を迎えるようになり、図書館なども在来の姿や機能は一変してしまうであろうというような未来予測も、情報化社会の問題が論じられる時によく聞かれます。ある程度、そのような傾向が見受けられるのは事実なのかもしれません。

しかし、この類の文明批評は、実は昔から、いつの時代にもあったのです。例えば、「この調子で馬車が増え続ければ、100年後にはロンドンの町は馬糞の山で埋まってしまうであろう」といった類の文明批評は、昔から、いつの時代にもあったのです。かつて、大正時代に、当時の映像情報のニューメディアであった活動写真、すなわち映画が登場し、大変な勢いで盛んになっていくのを見て、文藝春秋社長の菊池寛は大いに動揺し、「もう小説の時代は終わった。これからは活動写真の時代だ」と言って行末を嘆いたという話もあります。また、ラジオが普及し始めた時には、「もうこれで新聞はつぶれてしまうだろう」という意見も沢山ありました。

しかし、何時も決してそうはなりませんでした。現在の、全世界的に進展しつつある情報化の流れの中においても、例えば人間の精神の最高の産物の一つであり、人間の知識と思索の源泉とも言うべき書物が、この世から消えてなくなってしまうというような事は、何千年も後の後世ならいざ知らず、近い将来に起きるようなことはまずあるまいと思います。

新しい技術革新を冷静・賢明にとり入れて、図書館活動の一層の近代化・活性化をはかるべきことは当然のことですが、いかに情報化社会の到来とはいえ、図書館のもっている基本的な理念や伝統的な役割が簡単に消えてなくなってしまうとは思えません。

私は、かねがね、大学はその社会の豊かさと文化の象徴であり、図書館はその大学の学術研究と教育の象徴であらねばならないと思っています。今でもその考えに変わりはありませ

ん。そのような観点から現在の日本の大学、そして日本の大学の図書館をみてみますと、その現状はあまりにもお粗末であるといわざるを得ません。これからも、我々はその改善・向上にたゆまぬ努力を続けていかなければならないと思っています。

大阪大学図書館報が次の節目である通巻200号を目指して、これからも着実な歩みを続けられ、本学の図書館が今後益々充実・発展することを祈ってやみません。

『大阪大学図書館報』100号記念号発行に寄せて

名誉教授　宮　地　　徹

昭和42年9月に発行を始めた図書館報がこの5月で、100号になるとのことであるが、当時、私は、図書館長であり、その創刊号に、『図書館は、大学の象徴であり、利用されなければ存在価値が少ない』と書いている。この考えは今も変わらず、なお中之島図書館を利用させて頂いている。つまり、1960年の中之島図書館長から大阪大学図書館長としての10年に近い年月の間、図書館長としての経験から学んだことは、館長としては、私は全くの素人で、図書館業務を知らないということと、図書館長というのは帽子のようなもので、教授が図書館長を兼任するということが不合理であること、図書館員は、事務職ではなくて専門職であること、そして私は利用者の立場に徹しようということであった。

1954年の大阪大学医学伝習85年の記念に、医学図書館を造ろうという梶原医学部長のお考えに従って、1950年から学友会が母体になり外科の小沢凱夫教授が募金委員長になって奔走されたが、目標に達しそうにないので、梶原部長は、私に何とかアメリカから援助をして頂くように努力せよとの話であった。病理学をやっている私は、そういう金蔓に縁がないのでどうしたものかとむしろ当惑した。その頃、何かの用事でワシントンへ行くことになり、機上で二人の東大の方にお目にかかった。一人は柘植営繕課長、もう一人は後に東大図書館長になられた裏田教授である。チャイナメヂカルボード（CMB）の援助で、東大に医学図書館をつくるので、アメリカの医学図書館の運営や建物を見学するのだということであった。これは、私にとって天啓というべきで、ワシントンの用事がすむやいなや、ニューヨークへとんで、二人からきいたCMBを訪れた。丁重な取扱いではあったが、その反応は冷淡なものであった。CMBでは東大だけを援助することにきめており、その他の大学は考えていない。東大にいい図書館を造れば、やがて他の大学にも日本の費用で造る刺激になるであろうと考えているとのことであった。そして、図書館は駄目だが、毎年日本へ行くので、CMBのフェローに応募する人があれば、面接したいとのことであった。

こうして、マッコイさんとコネルさんが一年おきに、ときには、ラウクス先生（戦前は北京の協和医院の外科教授）が阪大を訪れるようになった。私は、フェローの応募者のお世話をするとともに、当時、中之島図書館の課長であった藤井和夫さんの作ってくれた図書館新設の資料をもって、毎年マッコイさんやコネルさんに迫った。そのうちに、CMBに資金を出しているロックフェラー財団に陳情してはとのことであったので、機会をえてニューヨークのロ財団を訪れ、ミス・パーカーやアンダーソン博士を知るようになり、これらの方々も阪大を訪れるようになった。歴代の医学部長の心のこもった応援もあって、中之島図書館の銘板にもあるように、CMBとロ財団から建築資金の寄付を受けて、1959年に建築にかかっ

たのが現在の中之島図書館である。やがて、千里に移ってさらに立派になるとのことであるが、生きていて見たいものである。

さて、中之島図書館の運営には、他の大学の図書館では見られない雑誌を集中するという習慣があり、それを強化した。一方では、専門職である図書館員の研修を両財団にお願いした。藤井さんを始めとし、図書館学で修士号をえた坂本君、徳村君その他の図書館員が渡米した。東大図書館事務部長というのは、わが国の大学図書館では、最高の職のひとつであるが、阪大図書館で成長した藤井和夫、田中久文、浅野次郎の諸君が相次いでその職を奉じているのは、私の心秘かな誇りである。もうひとつ、専門職の地位を高めるために、国立大学に情報図書館学科をおかねばならないと考え、図書館長会議のたびに力説したが、時期尚早であり、九大図書館長が、自分の教室でそのような教職につく者がまだ育っていないということでの反対もあり、具体化しなかった。時が移って、筑波に国立図書館情報大学ができて、東大図書館長であった松田先生が学長になられたのは、まことに嬉しいことである。

以上、老人の繰り言を述べてきたが、小沢先生始め梶原先生、各医学部長は故人となられ、アメリカからの援助者であった方々のうちで、まだ生存しておられるのは、コネル夫妻とミス・パーカーだけである。終りに、この館報が、ますます図書館とその利用者のいいつながりとなることを期待している。

大阪大学図書館の想出など

名誉教授　関　　集　三

1967年、岡田総長時代、宮地館長によって、大学教職員・学生と図書館との太いパイプ役として誕生した館報が、この度、100号を刊行される由、誠にお目出度く、この間の館員の皆様の御努力に対し、改めて心より敬意を表します。この記念すべき機会に、小生にも一言述べる機会をいただきましたので、小生の大阪大学時代（1935〜1979）の44年間を回想し、二三の想出を記させていただきます。

今から55年前、小生が阪大理学部に入学し、図書室に大きい親しみを覚えた最も大きい動機は、既に館報 Vol. 3, No. 5（1979）および Vol. 13, No. 1（1979）に述べました様に、初代総長長岡半太郎先生揮毫の額「勿嘗糟粕」を初めて理学部図書室受付の壁で眺め、その意味を当時の東大名誉教授高木貞治先生の書物「過渡期の数学」を通じて理解、読書の心構えの厳しさを教えられた時でした。この額はその後、多くの人々により引用され、阪大のシンボル的存在となり、昨年竣工の中之島旧理学部跡地の記念碑にも刻まれ、今回この記念号の表紙にも、改めて掲載されました。当時、入学間もない若い学生として図書館に対する大きい憧憬に胸をふくらませた、懐かしい想出があります。さらに二年後、卒業研究を始めるに当り、恩師仁田先生から新しい研究テーマをいただきました。先生からは、そのテーマの意義についての御説明はあったものの、「実行してゆく方針は自分で考えよ」といわれましたが、それを可能ならしめたのは連日図書館に通いつつそれを推進し得たことでした。幾多の内外の先人の研究論文や著書の質の良否を嗅ぎわける習慣は、この「整備された図書館の利用から生れる」との教訓でありました。

時移り、私は理学部選出図書館委員を経て、1969年、図書館長を仰せつかりました。時恰

も、大学紛争の真只中であったので、図書館の責任者としての役割と、理学部教授の一員としての区別のない役割分擔で苦しい日々でした。しかし今から考えると、そのような非常事態に直面して、より一層切実に、大学における部局としての図書館の中立性と重要な地位を認識できたということでした。大学予算の中から図書館に対しての優先的配分も得られ、また創立以来始めて、「図書館白書」を発表し、図書館の役割と問題点を全学教職員に提示出来たことでした（1970)。これらは館内の多くのすぐれた職員に支えられてはじめて可能となったことはいうまでもありません。それらの皆さんの御力添えにより、図書館近代化に必須のコンピュータ講座の開設を通じ、我国七大学に率先して電算機導入による事務機械化(1972）が、吹田分館の完成（1970）と本館増築（1972）を待って実施されましたが、1972年度の科学研究費がこれに対し認められたのもうれしい想出となりました。

私の図書館長時代は、我国大学図書館近代化の始動期で、あらゆる面で先進国に較べ20～30年も遅れているといわれておりました。上述のようなハード面では阪大図書館はすぐれた館員の皆様の先見性と御協力で改善されましたが、今日のはげしい進歩をしている情報化時代にあって、日進月歩の情報源と手段の多様化に対応した設備と、教育・研究に密着したサービスというソフト面ででは、依然我国は先進国に比し10数年の遅れがあるといわれています。これらの面では何よりもすぐれた人材が要求されます。幸い、小生退官後は、国立図書館情報大学が設立され専門家としてのライブラリアンが多く養成されつつあるとのことですが、この様な情況下で、阪大でも学内全体にわたるコンピューターネットワークのシステムが確立されて、一層迅速な高度のサービスが実現されていくことを期待しています。幸い、側聞するところでは、阪大では最近、生命科学図書館設立の準備が着々と具体化されつゝあり、それに伴って LRC（ Learning Resauce Center ）構想が実現されようとしていると聞いています。この完成の道程では、どうか、阪大全体の研究図書館並びに学習図書館の両面での発展を活性化する大きい波及効果を期待いたしたく存じますとともに、館報にも今後一層魅力ある創意に富んだ役割を期待して筆を擱きます。

カードからオンラインへ
――オンライン総合目録の現状について――

大阪大学には現在235万冊を越える図書と約５万種類の雑誌が所蔵されていますが、従来その検索手段である目録はカードか冊子体に限られていました。利用者が求める資料の所在を調べる場合、図書館に出向いて全学総合目録カードや学術雑誌総合目録等の冊子体目録を検索することになりますが、著者なりタイトルを正確に記憶していないと見つかりませんし、引き出しにぎっしりと何枚も並んだカードを繰るにもかなりの根気と熟練がいります。また雑誌については、冊子体では最新の受付情報を知ることはできません。

現在では、図書館に備え付けの利用者用端末（本館に５台、中之島分館に２台、吹田分館に１台あります）や学内の研究室・図書館にあるパソコンなどの端末を使ってオンラインで検索することが可能になりました。このオンライン閲覧目録(OPAC=online public access catalog と言います）はカードや冊子体目録に較べ様々な利点があります。端末のあるところならどこからでも容易にかつ迅速に利用できること、著者（姓）や完全なタイトルを知ら

なくても名前の一部やタイトル中の語から、さらに刊行年や、ISBN・ISSN などの書誌コードからも検索できます。また、求める図書が貸出中の時にはその表示があります。雑誌については昨日の最新受付巻号を知ることができます（図書の場合は入力の翌々日から検索可能）。

図書館では目録のオンライン入力を1987年から開始し、現在約10万冊の図書の書誌・所在情報が検索可能になりました。また、雑誌は全所蔵情報が入力されているほか、大型計算機センターへも本学洋雑誌データベースを提供してありますので研究室等の TSS 端末からそちらに接続して検索できます。

利用方法については、図書館内の端末からの検索システムはマニュアルが備えてありますのでそれをご覧下さい。また、学内端末検索システムの利用方法などについては、附属図書館システム管理掛（豊中地区内線2330）へお問い合わせ下さい。

教官著作寄贈図書

―本　館―

千原　秀昭（理・教授）
分子と人間
（Scientific American Library 1）
P.W.Atkins 著　千原秀昭他訳
（東京化学同人　1990）

平田　達治（言文・教授）
ナチス通りの出版社
平田達治他著
（人文書院　1990）

子安　宣邦（文・教授）
事件としての徂徠学
（青土社　1990）

久貴　忠彦（法・教授）
現代家族法の展開
（一粒社　1990）
民法読本３　第３版
久貴忠彦他編著
（有斐閣　1990）

大峯　あきら（教・教授）
句集　吉野
（角川書店　1990）

―中之島分館―

浅野　　朗（蛋・教授）
細胞生化学のすすめ
（講談社サイエンティフィック　1990）

恩地　　裕（元医・教授）
一片の生：ある病院長の病床講義
付カセットテープ
（へるす出版　1989）

―吹田分館―

山本　　稔（工・教授）
微分方程式とフーリエ解析
（学術図書出版社　1985）
常微分方程式の安定性
（実教出版　1979）
解析学要論（Ⅰ）微分方程式とラプラス変換
（裳華房　1989）

村田　　正（工・助教授）
電子回路の基礎―情報・電子入門シリーズ５
（共立出版　1989）

橋本　　奨（工・名誉教授）
ビッグバンから21世紀まで
〈私の環境原論〉：人間心性を探る
（ウォーターバイオテク研究会　1989）

バイオテクノロジー活用の高機能型活性汚泥法
（技報堂　1989）

岡本　郁夫（溶研・教授）
はんだ付・ろう付に関する研究論文集
（大阪大学溶接工学研究所　1989）

加藤　晃規（工・助手）
南欧の広場
（プロセス　アーキテクチュア　1990）

会　　議

分館長会議

2．3．16.（金）16：00〜17：00（本館　館長室）

報告事項：主要行事について。各分館長及び事務部長から、資料に基づき各種会議等の活動状況の報告を行った。

協議事項：1．平成2年度図書館事業費予算要求書（案）について。情報管理課長から、資料により各項目別に説明があった。なお、基本参考図書の購入については、本館予算事項に薬学部分館分も含めたい旨の提案があり、審議の結果、承認された。2．平成3年度図書館新規概算要求事項（案）について、情報管理課長から、資料に基づき、平成2年度の要求事項であった生命科学図書館LRC等の設備、電動式書架及び附属図書館本館増改築の他、図書館の整備充実として外国雑誌センター情報サービス担当要員の増についても新たに要求事項としたい旨説明があり、了解された。

豊中地区運営委員会

2．3．19.（月）10：30〜11：30（本館　会議室）

報告事項：いちょう祭について。情報サービス課長から、「いちょう祭」の展示内容について説明があった。

協議事項：1．平成元年度基本参考図書について。情報管理課長から、資料に基づき説明があり、本館要求事項に薬学部分館分についても含めたい旨の提案があり、情報サービス課長の補足説明後、協議の結果、原案どおり承認された。2．次期委員長の選出について。委員長から選出要領について説明があり、投票の結果、村橋委員（基）が選出された。3．不用図書の決定について。情報サービス課長から、資料の不用図書リストについて説明があり、協議の結果、原案どおり承認された。

図書館委員会

2．3．19.（月）15：00〜16：30（本館　会議室）

報告事項：1．中之島分館長、吹田分館長、豊中地区運営委員会委員長及び事務部長から資料に基づき、各種行事及び委員会の活動状況の報告があった。2．平成2年度予算について。事務部長から、資料に基づき説明があった。

協議事項：1．平成2年度図書館事業費予算要求書（案）について。情報管理課長から、資料に基づき、各事項別に説明があり、基本参考図書の購入については、本館要求事項に薬学部分館分も含めたい旨の提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。2．平成3年度図書館新規概算要求事項（案）について。情報管理課長から、資料に基づき平成2年度の要求事項であった生命科学図書館LRC等設備、電動式書架及び附属図書館本館増改築の他、図書館の整備充実として外国雑誌センター情報サービス担当要員の増についても新たに要求事項としたい旨説明があり、審議の結果、承認された。

中之島分館運営委員会

生命科学図書館ＷＧ会合〔合同会議〕

２．３．20.（火）15：00～17：00（中之島分館会議室）

報告事項：１．生命科学図書館建築計画の進捗状況について。施設部より説明の後、質疑応答が行われた。２．平成元年度第２回図書選定小委員会報告。３．日本医学図書館協会会長推戴について。

協議事項：１．図書館体系検討小委員会委員の選出について。医病の谷沢委員に代り、岡田教授が委員候補として了承された。２．生命科学図書館資料費分担金にかかる調査について。原案を一部修正のうえ、調査を実施することとなった。３．生命科学図書館資料収納方針について。収納方針の原案を了承し、各講座ごとの資料搬入希望アンケートを実施することとなった。

中之島分館運営委員会

生命科学図書館ＷＧ会合〔合同会議〕

２．５．23.（水）15：00～17：00.（中之島分館会議室）

報告事項：１．前回以降の主要行事について。２．日本医学図書館協会総会について。５月18日開催の第61回総会において、鈴木分館長が同協会の会長に選出された。３．生命科学図書館の進捗状況について。４．生命科学図書館資料費分担金購入雑誌第２次アンケート調査について。５．CD サーバーの導入と利用実績について。

協議事項：１．平成２年度中之島分館資料費部局分担金について。原案どおり了承された。２．平成３年度生命科学図書館資料費部局分担金について。分担比率および分担額について説明し、分担比率は了承し、分担額は各部局に持帰り検討する。３．資料搬入希望アンケート調査結果について。一部再調整する。４．生命科学図書館の規程類整備について。検討のための参考資料（素案）を配布した。

お知らせ

文献複写料金の改正について。

４月１日をもって文献複写料金の一部が改正されました。

電子複写方式による文献複写Ｂ４判（Ｂ４判以下の用紙を使用した場合を含む）

１枚につき	学内者	20円
	学外者	35円

これに伴い学内校費の料金も、１枚15円となりました。

なお、リーダープリンターによる複写料金も同様に改正されました。

OPAC の運用時間の変更について

６月１日より、平日（月～金）の10：00～18：00となりました。

日　程

2．3．16.	分館長会議	（本館）
2．3．19.	豊中地区運営委員会	（本館）
2．3．19.	図書館委員会	（本館）
2．3．20.	中之島分館運営委員会（第85回）	（中之島分館）
	生命科学図書館ワーキング・グループ会合（第31回）	（中之島分館）
2．3．22.	図書館建築基準に関する特別委員会（W・G）	（神戸大学）
2．4．20.	医学薬学情報団体利用者連絡会総会(第５回)	（大阪科学技術センター）
2．4．24.	文献複写委員会	（関西大学）
2．4．26.	図書館建築基準に関する特別委員会	（京都大学）
	近畿地区国立大学図書館協議会	（京都大学）
	近畿地区国公立大学図書館協議会企画委員会	（京都大学）
2．4．27.	近畿地区医学図書館協議会例会（第49回）	（関西医科大学）
2．5．8.	近畿地区国公立大学図書館協議会　平成元年度　主題別研究集会	（基礎工学部国際棟）
2．5．10.	図書館建築基準に関する特別委員会（W・G）	（神戸大学）
2．5．15.	図書資料（大型コレクション）収書計画打合せ会	（本館）
2．5．17～18	日本医学図書館協会総会（第61回）	（愛知厚生年金会館）
2．5．23.	図書館建築基準に関する特別委員会	（神戸大学）
	中之島分館運営委員会（第86回）	（中之島分館）
	生命科学図書館ワーキング・グループ会合（第32回）	（中之島分館）
2．6．4.	国立大学附属図書館事務部課長会議	（東京医科歯科大学）
2．6．5～6	国立大学図書館協議会理事会等	（東京大学）
2．6．14.	近畿地区国公立大学図書館協議会総会	（滋賀医科大学）
	国公私立大学図書館協力委員会	（関西学院大学）

人　事

大阪大学附属図書館長交替

任期満了　矢守一彦（文学部教授）　2．3．31

就　任　越田　豊（教養部教授）　2．4．1～5．3．31

異動前の所属・職名	氏　名	異動内容	発令年月日
		（採　用）	
	永田　智章	情報サービス課資料運用掛事務補佐員	2．4．1
	新井美智子	吹田分館資料受入掛　〃	〃
	森永　景子	〃　目録情報掛　〃	〃
	長棟　恵示	〃　資料運用掛　〃	〃
	森　敏昭	〃　〃　〃	〃
	影　洋江	医学情報課参考調査掛　〃	2．4．16
	松田　洋一	吹田分館資料運用掛　〃	〃

	黒川　寛	吹田分館資料運用掛事務補佐員	2.4.23
	富永　博	〃　〃　〃	〃
		（昇　任）	
情報管理課図書館専門員	故選　義浩	情報管理課課長補佐	2.3.16
経理部主計課予算第一掛主任	野元　猛	情報管理課会計掛長	2.4.1
情報管理課課長補佐	故選　義浩	佐賀医科大学教務部図書課長	〃
医学情報課雑誌情報掛文部事務官	山崎　隆史	兵庫教育大学教務部図書課閲覧係長	〃
		（配置換）	
東京学芸大学附属図書館情報管理課長	辻　英雄	情報管理課長	2.4.1
医学情報課資料運用掛長	小山　靖裕	情報サービス課理学情報掛長	〃
情報管理課図書受入掛文部事務官	水谷　幸子	情報サービス課理学情報掛	〃
情報サービス課理学情報掛長	谷田　功	医学情報課図書館専門員	〃
基礎工学部文部事務官	田中　稔美	医学情報課雑誌情報掛	〃
情報管理課会計掛長	中筋　健児	医学部附属病院管理課管理掛長	〃
情報管理課長	若月　修	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課長	〃
		（転　任）	
兵庫教育大学教務部図書課閲覧係長	柳瀬　吉雄	医学情報課資料運用掛長	2.4.1
		（所属換）	
情報サービス課理学情報掛文部事務官	和田山祥子	情報サービス課参考調査掛	2.4.1
		（併　任）	
医学情報課参考調査掛文部事務官	佐藤　博之	文部省生涯学習局学習情報課メディア係	2.4.1
		（出　向）	
医学情報課参考調査掛文部事務官	佐藤　博之	文部省生涯学習局学習情報課メディア係	2.5.1
		（退　職）	
情報管理課洋書目録情報掛事務補佐員	大石　早苗		2.3.30
吹田分館資料受入掛　〃	石田　有希		〃
〃　目録情報掛　〃	木下みゆき		〃
		（辞　職）	
医学情報課図書館専門員	岩井　勇		2.3.31

編　集　後　記

昭和42年9月宮地館長の時代に創刊された館報が、23年経った本号で100号を数えることとなって、総長及びお二人の名誉教授の先生から御寄稿を頂いた。装丁も長岡半太郎初代総長の由緒ある額を使用した。“粕糟嘗勿”の由来については、第13巻1号（1979年4月）掲載の関先生の解説に詳しい。御寄稿頂いた先生方、また、館報をここまで育ててくださった先輩並びに関係者の方々に深謝したい。これを機会に大阪大学附属図書館の発展のためにこの館報を一層充実させていきたいと念願している。

（H.）

大阪大学図書館報　Vol. 24　No. 1　通巻100号　平成2年6月15日発行
発行所　大阪大学附属図書館　〒560　豊中市待兼山町1の1　☎06(844)1151　内線2355